

戸田地区：全体として漁村的性格が強いが、戸田港周辺の漁業集落と山麓の農業集落とかなり明確に分化している。農業は急斜面が多くみかん園の分布が少ないので、専業とできない。漁業は遠洋漁業を主として非常に活発におこなわれ、専業漁家が多い。

これを発達史的にみると、封建時代には三地域いづれも村張的な立網漁業を中心に沿岸漁業を営む半農半漁村としてかなり類似した性格をもっていた。

明治時代に入ると全国的な漁業の大変革期をむかえたが、これに対応して調査地域の漁村は異方向に変貌していった。

まず、沿岸漁場にめぐまれぬため沖合漁業の素地であった戸田村は明治末期の動力漁船導入を契機に沖合漁業に進出した。

これに対し内浦・西浦は立網漁業に好適な自然条件をもち、沖合漁業の技術を有さなかったのでみかん業を導入し陸地に後退することにより漁業の行づまりをのりこえた。みかん業との兼業に支えられて沿岸漁業が維持されたが、みかん業に対しめぐまれた地形条件をもつ西浦は次第に漁業は副業化したのに対し、地形的に不利な内浦では依然として漁業を主業とせざるを得なかった。

第2次大戦以後、3地域の地域差は更に明確なものとなった。

戸田は戦後遠洋漁業がめざましく勃興し、県下有数の遠洋漁業地にまで発展した。

内浦は浅海養殖業が創始され、ここ数年著しく発展し、内浦の漁業の主体となっている。

西浦は戦後ほとんどの漁協組合員は海岸をはなれ、みかん園の拡大に力を入れ、みかん業の専業化が進んでいる。

江戸川デルタ南部の地理学的研究

— 主に土地利用変化からみた地域性の考察 —

栗原尚子

第一章 概説

1節 自然的概説

1. 微地形 2. 地質 3. 気候

2節 人文的概説

3節 地理的位置

第二章 土地利用の変化および地域性

1節 江戸川区地域(1-4期)

2節 行徳地域

第三章 災害

1節 風水害

2節 地盤沈下

3節 塩害

第四章 要約

当卒論の調査地域は、東京の東に位置し、デルタ性平野のため低湿地帯が卓越し、土地利用も従来水田が大部分を占めていたところである。地形は江戸時代以来人工的に改変されてきたが、荒川・中川両放水路以西ほどではない。沖積層は荒川放水路兩岸沿いに最も深く、下総台地に向かって薄くなっている。土地利用の変化をみると、明治以来農地面積の減少は著しく、とくに水田面積の減少が目だっている。第1期の江戸から明治初期にかけては、ほとんどの土地が水田で占められていたが、第2期の明治後期以後、第3期にかけて、当地域が大東京向けの蔬菜栽培地域としてその重要性を増し、加えて大震災以後の東京の拡大とともに宅地化がこの地にも及ぶようになると、この水田面積減少の傾向はますます強くなっていった。現在においては農地と宅地の面積の割合は逆転している。第2期の大正時代以後、市場に近接する有利な条件の下に発展していった蔬菜栽培を中心とした農業も、今や宅地化の進展とともに都会地における農業のやりにくさが顕著になってきている。農家の階層分化も昭和30年以後みられ、現在においては、2～3反の農家が、保存のきかないもので、土地の回転率のよいものを選んで蔬菜栽培を中心に行っている。

第2期にみられる新堀・鹿骨を中心とした花卉栽培は、震災以後昭和初期にかけて、めざましく発展した。また低湿地を利用した金魚の養殖も第3期に、二之江方面にみられるようになった。

以上のように蔬菜栽培・花卉栽培・金魚の養殖などは、かつて江東方面で盛んに行われていたものであり、江東方面が工業化するとともに当地域へ移ってきたものである。また、江東工業地帯の延長としての役割などを考え合えると、当地域は自らの内に核をもって発展していく地域ではなく常に外部（江東工業地帯、大きくは東京）からの浸透によって変化してきた地域といえる。

栃木県益子の地理学的考察

— 陶業を中心として —

関 口 敬 子

益子町は、栃木県と茨城県の県境に位置し、東に鶏足山塊、西に五行川低地、その中央は喜連川丘陵の南東端に当るといのように、地形的にも地質的にも非常に面白い所である。この自然の恵である粘土を利用し、関東以東では珍らしく大掛りに在来工業としての陶業を行なっている。

目的は、このような特殊な工業をもち、しかも首都圏内に位置しながら後進性の強いこの地域の地域性を把握することにあつた。しかし陶業に気を取られ、地域性を現わせなかつたのが、残念である。

益子町の特色といえば確かに陶業であるが、現実には何等かの形で陶業に従事している者は全部